



新十津川望郷会

会報 第十三号

先人の労苦を偲ぶ



新十津川望郷会会长

高 棒 政 義

に変わりがない」と思うのですが、反面住民生活の面から眺めてみると、確かに、鉄道もなかつたし、舗装道路もなく、車は、一日に五、六台砂煙をあげて通る程度のものでした。が、学校行事、青年団の活動、お祭り、正月、お盆など住民に連帯感があつて、地域住民がこそつて活動する活気が地区に満ちていたような気がします。

今年は、開町百二十年の節目の年に当たることから、町の事業に協賛させていただき、開拓時代の重労働、異郷の地での不安など、多くの困難を乗り越え、当町の基礎創りに当たられた先人の方々に、今一度感謝の意を表します。これ

を契機に、新しい町づくりに前進することができるなら意義深いものがあると思います。

個人的なことになりますが、私は、昭和六年の小学校入学なので、昭和初期の町の様子をうろ覚えに覚えています。その僅かな記憶を整理してみても、山や川そして道路も同じ場所にあり、なによりも、秋になると黄金波打つ稻穂が町一面に広がる様子など「今とそんな

新十津川町長

植 田 満



開町百二十年を迎えて

りました。このほかにもたくさんありました。

四月には、町内小学校四校が統合され新生新十津川小学校が開校し、次代を担う子供達が新たなスタートを切りました。

また、地方自治、産業、教育など町の発展にご尽力されました五名の方が長年の功績を認められ、栄誉ある叙勲を受章されました。

八月には熊本県で開催されました中体連において、新十津川中学校男子剣道部が、全国大会十一回目の出場を果たし見事八強に入り、敢闘賞を受賞いたしました。母村十津川村折立中学校も奈良県代表として出場し、「文武」の絆を持つ

十津川村と新十津川町の名が全国に響き渡りました。

さらに昨年は、各機関・団体の記念行事も盛大に催され、身障者福祉協会創立五十周年、交通安全指導員会創立四十周年記念事業なども行われました。

また、町民の皆さんのが安全で安心して生活していただくため、災害を想定した大規模な総合防災訓練を実施いたしました。

今年に入り関係機関のご努力に

初夏の季節を迎え、まち並みも木々や水田など緑一色となり四季の中でもっとも爽やかな季節となりました。望郷会員の皆様には、日頃より郷土新十津川町にご支援を賜り心から厚くお礼申し上げます。

昨年は、六月から七月の低温、多雨さらには、秋の収穫期には一部の地域で降ひよう被害があるなど農産物生産に大きな影響を及ぼしましたが、農業者の不斷の努力により、米については、十八年ぶりに全道一の収穫量を確保し、さらには道産米の象徴として期待されます「ゆめぴりか」の出荷量において本町のピンネ農業協同組合が全道一という実績を残し、米どころ新十津川の名が広く知れわた

より、去る四月三十日に交通事故死ゼロ千五百日を達成したことも最近の明るい話題であります。

さて本年は開町百二十年の記念すべき年に当たります。望郷会の皆様はじめ、奈良県副知事、県関係者の皆様、十津川村長、母村関係者の皆様、北海道知事、道関係者の皆様をお迎えし、先人の労苦を偲び、共に町発展のお祝いをできる事は、誠に欣快に堪えません。

これも本町にゆかりのある皆様方のご支援のお陰と深く感謝申し上げます。

明治二十三年に開拓の歴史がこの地におろされて以来先人諸賢の筆舌に尽くしがたい辛苦によりこの素晴らしい沃野が拓かれました。この大地を守り更なる発展を遂げることが私共の使命であります。

他に類例のない開拓の歴史を礎にあるまちづくり」をめざし邁進する所存でありますので、今後とも更なるご声援をお願い申し上げます。

終わりに皆さまのご健康と新十津川望郷会のご発展を心からご祈念申し上げごあいさつといたします。

橋本分教場と夏と冬の遊び



美唄市
(新十津川望郷会理事)

中井唯夫

開町百二十年の佳き年を迎え、先ず心からお祝いを申し上げます。

私は昭和二年下徳富で生まれ花月市街で幼い頃を過ごしました。

昭和九年下徳富小学校一年生に入学しましたが、父親が橋本町産業組合(農協)への転勤で二学期より橋本分教場へ転入しました。

橋本分教場は大正十一年に小学校二学年として設置されていますが、昭和九年私の転入した時は三年まででした。

一年生の受持ちは霜田貞先生(女性)で二階の教室でした。二・三年生は坂口六郎先生の担任で複式学級で一階の教室でした。総勢六十余名の仲のよい子ども達でした。

「活力と創造」「健康で生きがいのあるまちづくり」をめざし邁進する所存でありますので、今後とも更なるご声援をお願い申し上げます。

終わりに皆さまのご健康と新十津川望郷会のご発展を心からご祈念申し上げごあいさつといたします。

び伸びと遊びまわって生活していました。

分教場の前には狭いながらもグランドがあり、勉強が終ればすぐに何人もの友達が集ってきて、田舎野球やボール遊び、そして七人ぐらのチームを作つて対抗の陣取りゲーム等、グループでの遊びを暗くなるまで熱中したものでした。

分教場の勉強の様子は余り覚えていませんが、学芸会の劇「花咲かじいさん」の練習で、霜田先生に何日間も教わった事は今も印象に残っています。

子どもは遊びがお手の物で、夏は何と言つてもすぐ近くの石狩川に飛び込んで河童のように泳ぎました。橋本町側の川岸に流れを緩やかにする石を積んだ堤防のような所が数ヶ所あり絶好の水泳場でした。

誰か水泳の上手な人が教えてくれるわけではなく、見よう見ま似的にび込んだり潜ったり、泳ぎとしては犬かきが主なもので、抜き手ができればよい方でした。

日焼けをして背中の皮がむけました。寒い日は川岸で焚火をして、焼きいもを食べた事もありました。

パツチ取りもしました。

夏から秋にかけて蟹釣りを石狩橋の欄干からやりました。丸い輪に網を張り、その中に魚の頭などの中身をつけ重りをつけた道具を橋の中央付近の欄干から紐で川底に沈めて蟹を釣るのです。

川蟹は今の毛蟹を小さくしたような蟹ですが、赤く茹であげて食べると美味しいもので、父の晩酌にはとても喜ばれました。

冬の遊びはスキーや橇遊びが中心でした。現在のようなスキー靴はなくゴム長靴でしたし、皮のバンドでとめていました。また今のような立派なスキー場など全くありませんので、滑れる場所を見つけなければなりません。

橋本町では石狩橋の麓にあたる崖が丁度子どもの手頃な八九メートル高さがあり、割と急な傾斜もあります。スキーデスリで滑り降りる遊び場となりました。滑り降りた所にジャンプ台を作つて飛んだりしましたが、滑る斜面が短いので回転は余りできませんでした。

吹雪の中を転んで雪ダルマになつたり、毛糸の手袋が氷で冷たくなつまでも崖斜面を一步ずつスキ

を踏みしめ登つては滑るくり返しですが登りは大変でした。

思い出すままに私の生まれ育つた新十津川町、とりわけ橋本町そして分教場の事など懐かしさいっぱいで書きました。大切な故郷の新十津川町の益々のご発展を心からお祈りしております。



私のふる里を思う

(砂川市
新十津川望郷会監事)

村上新一

私は(旧)新十津川村字下徳富四号川二線(第十区)で誕生、(旧)下徳富尋常小学校(花月小学校)卒業、道立砂川中学校に入学後、道立砂川高等学校卒業(この間下徳富より徒歩約八頃、石狩川は渡船にて通う)。高校卒業後は国家公務員となり道内各地(滝川、砂川、札幌、北見、旭川、釧路、岩見沢、函館等)を転勤、それぞれの転勤先では新十津川で学んだ剑道を通じ各地域の先生、先輩、

同僚等から心地よい汗を流させていただいたことで健康を維持できましたものと思っています。

さて、剣道の町新十津川町は今や全道はもとより全国的に名を馳せ新聞、テレビに報道、放映され自分のことのように誇りに思い嬉しい感じます。後輩達がこの勢いで火を消さないよう願うものです。

私も下徳富小学校当時、故澤井信雄先生より剣道の手ほどきを受け、自分の身に染み込んでおり、今なお八十歳の老剣士として週四回の稽古を休まず道場通いを続け、青少年の指導に当たっております。いわゆることには新十津川魂が元々私に洗脳されていたものと考えており、新十津川で育てて頂いた思いは決して忘ることなく、これからも生涯剣道を頑張って行く覚悟です。

今年は新十津川町開町百二十年、記念すべき節目の年であります。今後貴町の益々のご発展をご祈念申し上げ終了とさせて頂きます。ありがとうございました。

ふる里があるから
今の自分がある。

早速、祖先のお墓をお参りする

祖父の「ふるさと」を訪ねて



(札幌市
新十津川望郷会理事)

玉置 豊

明治二十二年八月、奈良県十津川村は大豪雨、大洪水になり、私の祖父は十津川村を後に集団移住により、新十津川の地に開拓の鍵を入れた。当籠地は、下徳富川二線でしたが、当時この地は、石狩川の再三の水害のため上尾白利加に再度住所を移したと聞いています。平成七年十一月、この祖父の

「ふるさと」である奈良県十津川村を訪問することになり、奈良県吉野郡十津川村字竹筒が祖父の「ふるさと」と聞いていましたのでその住所へ。その地は山の中腹にあり崖を掘り、道路を造り、車がやつと通れる所で、この崖の所々に民家が散在し、この下は川が流れています。訪問先は、父の従兄にあたる人で大変歓迎してくれました。

ことになり、この崖の下を流れる川の近くで小高い丘の上に、玉置家のお墓が並んで立っていました。お墓にお参りした時は、本当に感謝の気持で一杯でした。曾祖父玉置文悦は医師で、この地で開業し村人を助けていたようです。祖父留吉は三男で新十津川に集団移住しました。

宿泊はその開業医の昔の診療所で泊り、入浴は近くの和歌山県の温泉でした。

翌日は、玉置山の裏道を、やつと通れる狭い道を曲りながら進み、やつと山頂に到着しました。そこには樹齢千年ともいわれる杉の老木が立ち、そして歴史のある玉置神社があり、参拝した時は感動しました。その後社務所に立ち寄り、有名な画家の絵を拝見させていただき、その後は十津川村の街を見学し、そして高い吊り橋を途中まで渡りましたが、恐ろしくなり戻りました。十津川村の一部分でしたが、歴史と伝統のある村に私達の先祖が住んでいたことに深い感銘と感動をおぼえ、帰宅の途につきました。

十津川村への旅



札幌市

青木郁子

「日本一大きい村」といわれて
いる奈良県十津川村に行くには、
名古屋駅から近鉄特急に乗り一時
間四十九分。そこから奈良交通特
急バスに乗り換えて十津川温泉ま
で四時間要する。

今思い返してみると、主人は妙
に十津川への旅を急いでいたよう
に思う。自分の祖先が十津川郷士
であり、祖母や大伯父(司馬遼太
郎『街道を行く』に青木金吾とし
て出てくる)が新十津川の開拓移
住者ということを誇りに思つてい
た。平成十六年、長年の念願であつ
た十津川行きを二度目の挑戦でやつ
と実現させる事が出来た。

以前、十津川に向かった時は、
霧雨程度の雨で道路が遮断され、
行く手を阻まれたのである。大和
八木駅でバスを待っていたが定刻
になつてもバスはやってこない。

今回はなんとしてでも辿りつかな
ければと客待ちの営業車を横目で
見ながら内心はらはらしていた。
その私たちの想いとは別にバスは
ゆっくりと到着した。二種類しか
売っていない弁当を買い、バスに
乗り込んだ。なにしろ日本一長い
バス路線である。他には六十歳ぐ
らいの主婦が三人、呑気といえば
呑気な旅である。

果てしなく山路をのぼり、途中
運転手の交代もあり私は眠りこん
でしまった。ふと眠りから覚める
と主人は言つた。「休んでいて良かつ
たよ。渓谷が険しくて恐ろしいほ
どの景色だつた」という。私を起
こしたら大騒ぎすると思いそつと
しておいたのだと分かつた。バス
酔いもなく、やつと十津川村に到
着した。

まずネットで予約しておいた、『山
水』という旅館に行つた。そこ
の女将さんに予め青木の縁戚関係を
搜して頂くようお願いしていたの
だが、該当者は見つからなかつた
という。役場にも行き調べたが親
戚関係には辿りつけなかつた。考
えてみると青木の先祖は開拓第一
団より遅れること十三年、明治三

十五年の移住なので記録が残され
てなかつたのである。

歴史民俗資料館に行つた。南北朝、
明治維新など歴史の節目に十津川

郷士の名がでてくる。護良親王か
らのご下賜である文箱も展示され
てあつた。十津川郷士の歴史的役
割も少し分かつてきた。

陸の孤島である十津川はいまだ
に古の趣を残しており武術も盛ん
なのだと感じた。夜は自然石で出
来た温泉に入ったが今まで経験し
たことがない温泉の醍醐味をあじ
わうことができた。何ひとつ見え
ない漆黒の闇、その暗闇を破るか
のような、野生鹿の鳴き声は圧巻
だつた。帰りは新宮(和歌山)の
ほうに向かい一泊二日の旅は終わつ
た。

百二十年前、先人の方々は、ど
んな思いで北海道へ渡つたのだろ
う。先の見えない不安に押し潰さ
れそうだつたのではなかつたか。
いろいろ考えさせられる旅だつた。

この度初めて望郷会にお邪魔し
ましたが、不思議と緊張感もなく
ほんとうに楽しく過ごさせて頂き
ました。主人は平成二十一年一月

に亡くなりました。最後まで十
津川の事を話しておりました。今
頃はきっとあの渓谷に抱かれてい
ることでしょう。

先祖のふるさと 十津川村への思い



札幌市

西美章

私の曾祖父家族は明治二十二年
八月、奈良県十津川村を襲つた未
曽有の大水害により、六百戸、二
千六百余名と共に集団で北海道へ
の移住を決め、新十津川町下徳富
十区(現在の花月九十四番地)に
落ち着きました。

家族はそこで稻作農業を営み、
私はその四代目として生まれまし
た。私はそこで高校時代まで過ご
しましたが、昭和四十年、家族の
離農により、札幌市白石区に移り
住み現在に至っています。

子供の頃祖父から「我が家家の先
祖は奈良県十津川村出身で明治二

十二年に奈良県を襲った大水害で北海道へ集団移住した」と聞かされておりました。

平成十七年、熊野古道が世界遺産に登録されると、一躍十津川村周辺も脚光を浴びる様になり、十津川村は先祖のふるさとでもある事から、私も十津川村への関心が強くなりました。しかし十津川村へはまだ行つた事がありません。

そこで資料や雑誌等で調べてみると、十津川村は日本一広い村である事、昔は陸の孤島でほとんど人の入り込まない秘境であつた事、そのため山や渓谷の多い自然そのままの美しい景観がある事、さらに日本一長い吊り橋の事など地理的にも辺鄙であるが誇れる観光名所である事、など再認識した次第です。

また昔から十津川生まれは十津川衆と呼ばれ、その気質は純朴で団結力が強い事から京都の天皇や朝廷からこがれ、自らも十津川郷士として進んで京都の警護に当つております。その結果朝廷から菱十印の御旗を賜つております。そのため、日夜剣術の鍛錬に励んで

おりました。

現実の十津川村は熊野古道が世界遺産に登録された影響で観光客も多くなつてゐる事と思います。先祖のふるさとは西家の「ルーツ」でもある事から、是非一度行つてみようと思つております。

故郷の思い出は宝物



札幌市
深瀬良藏

◆まえがき

私は、新十津川町吉野に在住した頃の思い出が沢山ありますが、その中から冬の季節に唯一の交通手段でもあつた馬そりと、留久ダ

ム（現新十津川ダム）の建設工事に従事した頃の思い出を記してみたいと思います。

◆滝川までの馬そりの旅

私が吉野小学校（平成二十一年三月、百三年の歴史に幕を降した）在学時代は、冬になりますと、滝川（吉野間（現国道四五一号、約

十六棟）が雪のため、幅七十七メートル程の馬そり道しかなくなり、沿線住民の足は、もっぱら馬そりが唯一の交通手段でもありました。

昭和二十年頃から二十九年までは、父が馬そりで吉野市街の商店の商品を滝川から運搬する仕事を引き受けっていました。

そして、学校が休みの日には、父にお願いして乗せてもらうことになりましたが、寒い朝の五時頃には、起きて馬の支度などをして六時頃に出発し、学園の辺りまで来ますと、東の空を赤くそめながら朝日が昇つて来ました。

さらに途中の里見峠の辺りまで来ますと、滝川の人石（石炭から油を抽出する工場）の煙突が望まれ、蒸気機関車の音が聞こえて来て、馬そりに乗つていてとても快適な旅でした。

石狩川に架かる橋を渡つて滝川の踏切（函館本線で、現アンダーパス）を過ぎて市街地に午前十時頃に到着し、魚屋・小間物・雑貨等の問屋さんを数軒回つて、吉野市街の商店から頼まれていた商品を馬そりに山のように積み込んで、午後三時頃には、また来た道を吉

野へ帰ることになりますが、今度は、馬そりに乗る事は出来ません。

私は、寒さに耐えながら馬そりの後に付いて歩きましたが、馬はとても利口で厩へ帰る時には、手綱を持たなくとも、足早に歩いて四時間ほどで吉野に到着し、それ

ぞの商店へ商品を引き渡して、我が家に帰り馬を厩へ入れる頃には、夜の八時過ぎだつたと思います。

多分、学園から吉野・留久・南部から西徳富支所へ現金（三十万円）の運搬も引き受けて来ました。父が運搬した商品を買い求められたと思います。

さらに父は、新十津川農協の本部から幌加・北幌加などの地域の人達は、父が運搬した商品を買い求められました。

しかし、この時ばかりは、家族も心配して、間違ひがないように祈つておりました。

そして、昭和二十九年に留久ダム（現新十津川ダム）の建設工事

が着工となつて、滝川（吉野間の道路が除雪され、年中バスや車両の運行が可能となり、永年に亘る

馬そりで商品を運搬する仕事も終りとなりました。

その父(菊三郎)は、十九歳で母村の十津川村から新十津川町へ移住して、五十年間お世話になって昭和四十四年十二月に六十九歳で他界しました。

◆留久ダム建設事務所に就職

昭和二十九年には、留久ダム(現新十津川ダム)の工事が着手となつた年であつたが、私は吉野の実家で農業を手伝つていたところに、留久ダム建設事務所の管理人さんが来訪し「お前さんひまにしていいなら、ダム建設事務所で働いてみないか。明日から来てもらつてもいいよ。」と言われるままに、その翌日(七月二日)に、家から徒歩二十分ほどの事務所を訪ねましたところ、所長から「ダムの測量班に付いて作業を頼みますわ」と言われ、早速その日から留久ダムのダムセンターの辺りで、ほぼ垂直な崖に作られたジグザグの作業道を川底から、直高三十メートル(ダム天端)まで、十キロを超える測量器械を背に登り下りして、箱尺やポールを立てたり、障害となる草木を伐採しましたが、私が予想し

ていた仕事とは、余りにもかけ離れた重労働だったので、止めようかと思つていきました。

◆ダム盛土の土質試験を担当

その二週間ほどしてまた所長から、「深瀬君には、今の仕事はきついようだから、明日からダムの土質試験をやつてもらうから、現場土質試験班に付いてこちらで仕事をやつてもらいますわ」等と言つて、その主任さんへ私を紹介してくれました。

そこは平屋の六坪ほどで、入口には「現場土質試験室」の看板が掲げられていました。

そして、翌日から今度は、ダム上流の盛土材の土取り場で、五十メートルの碁盤目状に測量し、その交点に深さ二メートルほどの坪掘をして、土質調査と試験用の試料をかますや特製の木箱を作つてもらつて、それ採取してジープ(米軍払い下げ)で現場土質試験室へ運び込み、「JIS規格の土質試験法」に従つて試験を実施しましたが、こちらも、米軍が規定した土質試験法を直訳したようなもので、参考書もほとんどありませんでした。

このため土質試験器具メーカー

の使用説明書を何度も読み返す等して独習し、十種類位の土質試験をして記録に残したのであります。

その中で、一番困つたことは、

土の含水量試験でしたが、JIS規格によりますと、百十℃の電気乾燥炉で、十二時間乾燥して含水量を計測する事となっていました

が、ダム盛土現場では迅速に対応する必要に迫られ、JIS規格の土質試験法による試料と、迅速乾燥法(米穀の含水量検査器)、ライ

トを七く八分程照射する計測方法で、二個の試料を採取して、一つは、JIS規格に従つて乾燥し、もう一つは、迅速乾燥法で乾燥する等して含水量を計測する方法を採用した訳です。

◆計算尺を使用し試験記録を整理

当時は、電卓のような便利な計算機というものが全くなく、唯一手回しのタイガー計算機のみであつたため、私はヘンミ計算尺(竹製で長さ二十五メートル)を買い求め、掛け算・割り算に使用して、足し算・引き算はそろばんを使用しました。

早く言えば、巨大な留久ダムの盛土施工管理の試験記録は、計算

尺と算盤によつて計算し、データ整理をした訳であります。

あの頃は、現在の便利な電卓等

が発売される前で、昭和四十三年頃になつてようやく電卓らしきものが発売されましたが、持ち運びには大型でとても重かつたように思ひます。

◆ダム盛土の建設機械は試作車だった

留久ダムの建設当時には、敗戦の九年後だつたため、日本には満足な建設機械がほとんどなかつた時代であり、おんぼろブルドーザやおんぼろトラック等を使つてダム上流の土取場に積み込み場を設け、ブルドーザを使ってトラックに積み込んでダム現場まで運搬し、それを別のブルドーザで敷均しておりました。

後に小松製作所が製造した二十トン級のダンプトラックの試作車やアメリカのターナップル(殿様バッタ)のような形の機械。四輪駆動車でタイヤの直径が一・五メートルほどを詰め込んで走行し、敷均す

る事が出来る一台で四行程をこなす優れもの)と自走式タンピング



ローラー等を直輸入して、昭和十三年の秋には留久ダム工事がほぼ完了し、隣りの雨竜町の尾白利加ダム（現暑寒ダム）の盛土工事が着工となつたため、私はそちらへ転勤となりました。

◆あとがき
数年前でしたか、新十津川町を訪ねた時に、留久ダムのかんがい用水で生育した米を食味しましたが、ダム工事現場で苦労した頃の情景が瞼に浮かんで来て、感激しました。

その留久ダムは、湛水池内に流入する堆積土砂（肥沃土）の搬出等の維持管理をしつかりすれば、今後千年は使用に耐えられるかと 思います。

こうして新十津川町で過ごした二十二年間の青春時代の思い出は、歳月の経過と共に輝きを増して宝物のように思われます。

十三年の秋には留久ダム工事がほぼ完了し、隣りの雨竜町の尾白利加ダム（現暑寒ダム）の盛土工事が着工となつたため、私はそちらへ転勤となりました。

新十津川町トピックス

～まちの出来事～

春と秋の叙勲で5名が受章

昨年6月27日農村環境改善センターで春の叙勲を受章されました3名の方の叙勲受章祝賀会が開催されました。

受章者

瑞宝小綬章

境 和一様
(元高校校長)

旭日双光章

続木俊一様
(土地改良区理事長)

瑞宝双光章

福崎正生様
(元自衛官)



昨年12月6日農村環境改善センターで秋の叙勲を受章されました2名の方の叙勲受章祝賀会が開催されました。



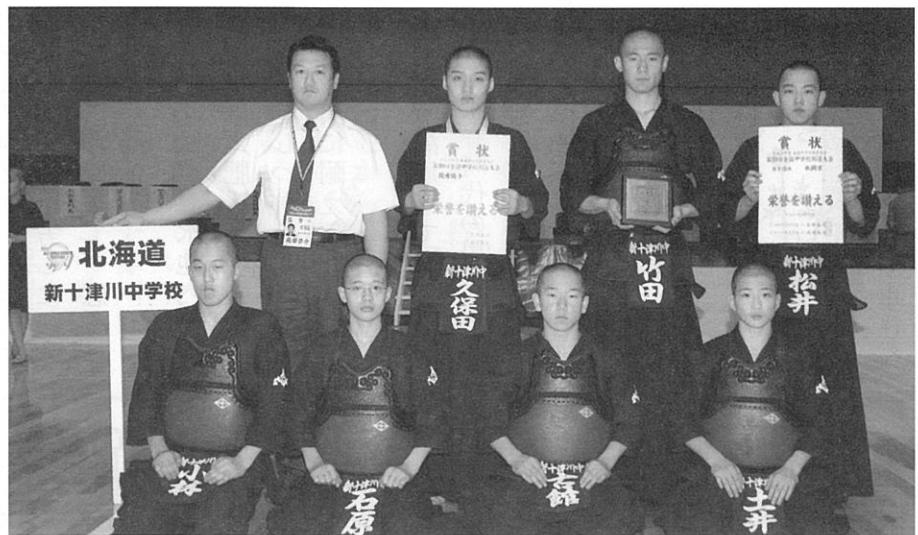
受章者

旭日双光章
久保田文雄様
(元町議会議長)

瑞宝双光章
山香靖時様
(元消防団団長)

全国中学校剣道大会8強

昨年、8月18日から20日にかけて熊本県人吉市で行なわれた第39回全国中学校剣道大会で、新十津川中学校剣道部が男子団体でベスト8に入り敢闘賞を受賞いたしました。予選リーグでは島根県、佐賀県に勝ち決勝トーナメントに進出、決勝トーナメントでは、1回戦埼玉県に勝利、ベスト4をかけた準々決勝では、今大会優勝校の地元熊本県と戦い、惜敗いたしました。母村十津川村折立中学校も奈良県代表で出場し、健闘いたしました。



総合防災訓練開催



災害時の被害を最小限にとどめることを目的に総合防災訓練が昨年8月23日に石狩徳富河川緑地で開催され国、道、陸上自衛隊、消防署、警察署などの機関と行政区や赤十字奉士団、住民など300人が参加しました。

開町120年記念植樹祭

5月30日を開町120年を記念して、ふるさと公園創造の森に希望者160人参加のもと記念植樹祭を行いました。参加者は開拓により始まった先人たちの歩みを再認識する120mの散策路沿いにイチョウやナナカマドなど四季を感じる木々300本をていねいに植樹しました。



開町120年記念事業をお知らせします。

事業名	開町120年記念植樹			担当	産業振興課
日 時	5月30日(日)	場 所	ふるさと公園内創造の森		
概 要	開拓により始まった先人たちの歩みを再認識する120mの散策路沿いにイチョウやナナカマドなど四季を感じる木々300本を植樹しました。				
事業名	開町120年記念式典			担当	総務課
日 時	6月20日(日)	場 所	ゆめりあ		
概 要	120年の節目の年である今年の開町記念式典は、多くの町民の皆さんに参列していただき、献花も参加できるようにして開催します。				
事業名	移住ウォーク			担当	教育委員会
日 時	6月26日(土)	場 所	三笠道の駅～新十津川町		
概 要	明治22年に三笠市市来知から滝川市空知太まで歩いてきた移住当時の苦労を体験し、まちづくりへの思いを新たにするために、三笠市道の駅から菊水公園までの38kmを歩きます。				
事業名	第56回北海道消防協会空知地方支部中空知分会連合消防演習			担当	滝川消防署新十津川支署
日 時	6月27日(日)	場 所	防災センター		
概 要	消防団員と職員の資質向上と士気の高揚に努め、消防技術を練磨するために大規模な消防演習を開催します。さらに公道で行進をするなど、広く町民が目にして防火への意識向上にもつなげます。				
事業名	健康しんとつかわ！みんなでラジオ体操			担当	教育委員会
日 時	7月28日(水)	場 所	ふるさと公園		
概 要	町内小中学生や保護者(子ども会単位)、体育協会加盟団体やその他各種団体の幅広い参加者でラジオ体操を実施し、日常的な健康づくりの大切さを啓発する機会とします。				
事業名	復活！今年限りの町民運動会			担当	教育委員会
日 時	8月8日(日)※雨天中止	場 所	新十津川小学校		
概 要	各行政区単位をチームとした運動会を開催し、住民の健康づくりへの関心や親睦融和を深めることにより、まちづくり意識の高揚と地域コミュニティづくりに取り組みます。				
事業名	出張 なんでも鑑定団 in しんとつかわ			担当	総務課
日 時	11月21日(日)	場 所	ゆめりあ		
概 要	「出張 なんでも鑑定団」を本町で開催します。 番組の収録日が決定しました。※放送日は未定				
事業名	タイムカプセル設置			担当	住民課
日 時	11月21日(日)	場 所	ゆめりあ(設置場所)		
概 要	<p>開町120年を記念し「30年後の未来へ贈る」と題して、開町記念式記録などを 開町150年に開封するまで保存します。</p> <p>【カプセルに封入するもの】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中学生から募集したメッセージ「30年後への自分へ」。 ・一般からも希望者を募ります。 ・開町120年事業の記念品と写真 ・植物の種子等(野菜、コメの種もみ、その他種子) ・開町120年を報じた新聞、チラシ ・開町150年の記念式に使用する横幕 <p>※「出張 なんでも鑑定団」の収録日に合わせて実施します。</p>				



事業名	日本一！あいさつのあふれるまちづくり事業			担当	総務課
日 時	通 年		場 所	町内	
概 要	開町120年を契機に、従来から取り組んでいるあいさつ運動をさらに強化し、明るいまちづくりにつなげます。健全育成町民会議やPTA、安全・安心推進協会と連携するほか、ティッシュ配付による啓発活動、広報誌での啓発活動を展開します。				

事業名	120年記念タオル配付			担当	総務課
日 時	通 年		場 所	一	
概 要	開町120年記念各事業参加者に、記念品としてタオル3000本を用意し贈呈します。				

新十津川望郷会役員名簿

役職名	氏 名	郵便番号	住 所	電話番号	備 考
顧 問	山 本 敬一郎				前会長
	植 田 満				町長
	長 名 實				町議会議長
会 長	高 棚 政 義				札幌花月会会长、札幌郷友会副会長
副 会 長	谷 口 次 雄				
	中 川 昭 五				
	増 谷 俊 秀				
	川 合 正 修				
理 事 事	田 崎 利 勝				さっぽろ大和会会长、札幌郷友会副会長
	篠 内 穂				さっぽろ吉野会会长、札幌郷友会会长
	和 平 康 伸				郷友会中央会会长、札幌郷友会副会长
	杉 村 修				深川支部支部長
	玉 堀 光 夫				郷友会中央会副会长
	中 井 唯 夫				
	玉 置 豊				
	西 井 勝 明				
監 事	岡 田 功				札幌郷友会事務局長
	村 上 新 一				砂川支部支部長
事 務 局 長	佐 川 純				副町長
事 務 局 次 長	熊 田 義 信				教育長
	石 田 賢 吉				総務課長

※この名簿は、個人情報保護の観点から望郷会の目的以外に使用することを禁じます。

印刷	新十津川望郷会	新十津川町字中央三〇一番地一	二〇一〇年六月二十日発行
広小路印刷株式会社	新十津川町役場内	新十津川町副町長（新十津川町副町長）	二〇一〇年六月二十日発行
二二五—七六一—二二三一	佐川純	新十津川町字中央三〇一番地一	二〇一〇年六月二十日発行

新十津川望郷会会報
第十三号

新十津川望郷会会報第十三号
を発刊するにあたり、役員並びに会員の皆様にはご投稿のご協力を賜り、心からお礼申し上げます。今期は、開町百二十年の記念年となりました。来年の十四回の発行に際しましても多くのご投稿をお待ちしております。（原稿用紙を送付させていただきますので、事務局まで電話等でご連絡くださいますようお願い申し上げます。）

編集後記